優秀賞

弾き継がれる平和の音色

山形県　米沢市立第二中学校三年　石田　愛梨

「コンサートに参加してみませんか。」

ピアノの先生からの紹介で参加した「被爆ピアノ平和コンサート」、そこで使われたのは、広島に原爆が投下された時に爆風と熱風にさらされながらも、弾くことができる状態で残った奇跡のピアノでした。鍵盤が黄ばんで塗装は剥がれていましたが、指を載せると優しく美しい音色がしたことに、私は声を失いました。ピアノの修理と調律をした方が、

「弾く人が居てこそ、初めてピアノが奏で始めるのです。沢山の方達に弾いて頂きたい。」

と思いを述べられました。私は弾きながら、このピアノの持ち主の方について思いをはせました。持ち主の女性は、このピアノをとても大切になさっていたそうです。原爆が投下されたその日、彼女が失ったのはピアノを弾く喜びだけではありませんでした。家族、友達、家、自分にとってかけがえのないものを一瞬にして奪われたのです。何一つ不自由がない生活を送る私には、彼女の気持ちを想像することができませんでした。

「もっとピアノを弾きたかった。どうして同じ人間同士が傷つけ合い、ピアノがこんな姿に変わり果てる威力を持った爆弾を、どうして私達に投下できたのでしょう。」

彼女と同じようにピアノを大切にしている私には、ピアノの音色に彼女の言葉が重なるように響きました。

授業では戦争がとても遠い過去の出来事のように感じました。しかし、被爆ピアノを弾いた経験は、戦争を「悲しい歴史」として記録するだけではいけないのだと教えてくれました。戦争を体験された方達が高齢化し、その悲痛な体験を語り継いで頂くことが年々困難になってきています。だからこそ被爆ピアノを「歴史の目撃者」として大切にしなければならないと思います。

ピアノの鍵盤の色を白人と黒人に例え、ピアノが織りなすハーモニーのように人々が調和することを願う歌があります。歌詞の中に「どこへ行こうと人はみな同じ、誰にでも長所や短所がある」とあります。今、世界中で差別や争いが起き、沢山の人が苦しんでいることを考えると、この歌詞が心に染みます。私は被爆ピアノの白鍵と黒鍵が届ける美しい音色を決して忘れません。

原爆投下から七十九年。安全な暮らしが保証された私達にとって、戦争は遠い外国の悲劇です。私は被爆ピアノを弾くという貴重な経験をして、戦争の恐ろしさを初めて身近に感じ取ることができました。悲劇を目撃したピアノは、今、持ち主や主催者、調律や運搬をする人、そして演奏者によって、耳を傾ける全ての人々に平和の願いを届けています。人の命は尽きる日が訪れますが、沢山の人々の願いをのせて弾き継がれるピアノの音色は美しいままに響くはずです。私は大好きなピアノを弾き続け、白鍵と黒鍵が生み出すハーモニーを通して、人々が平和を考えるきっかけになるような素敵な演奏をしたいです。